



## 能忍寺たより

## 行事紹介

## ○花まつり(かんぶつえ)

花まつり(灌仏会)は、仏教の開祖であるお釈迦様の誕生を祝う行事で、毎年6月8日を中心に行われます。お釈迦様が約2500年前、インドのルンビニ園で誕生した際、天から九頭の龍が現れて甘露の雨を注いだという伝説に基づいています。

お寺では、色とりどりの花で飾られた「花御堂(はなみどう)」が作られ、その中にお釈迦様の誕生の姿を模した「誕生仏」が安置されます。参拝者は、柄杓で「甘茶」を誕生仏の頭から注いでお祝いするのが習わしです。この甘茶には、無病息災や子供の健康を願う意味が込められており、参拝客に振る舞われることもあります。

桜が咲く美しい季節に行われるため、仏教徒だけでなく地域の人も親しまれており、稚児行列などの華やかな催しが行われることも多い、春の穏やかな伝統行事です。

## 今月のことば

## ○随縁不変(ずいえんふへん)

「生滅滅已」とは、仏教の根本思想を説く「諸行無常」に関連した言葉で、有名な「雪山童子(せつせんどうじ)」の物語に登場する「いろは歌」のルーツとなった言葉の一部です。

文字通りには「生じたり滅したりという流転のプロセス(生滅)が、すでに静まった(滅已)状態を意味します。この世のすべてのものは常に移り変わり、生まれては消えていく不安定なものです。その激しい変化に執着する心を捨て去り、変化そのものを超越したとき、本当の安らぎが訪れると説いています。

つまり、単に「死ぬこと」を指すのではなく、迷いや苦しみを生む「変化への囚われ」が消えた、悟りの境地(寂滅為樂)を表現する深い智慧の言葉なのです。

## コラム あれもこれも仏教用語

## ○執着

日常で「一つのこと」に固執する」という意味で使われる「執着」は、もともと仏教における苦しみの根源を指す重要な言葉です。

仏教では、物事や人間関係、あるいは自分自身の考えに強くしがみつき、離れられない心を指します。お釈迦様は、この世のすべては常に移り変わる「諸行無常」であると説きました。しかし、私たちは変化するものを「永遠であつてほしい」と願い、手放すことを恐れます。この「現実と願いのギャップ」こそが、心の苦しみを生む正体であると考えられています。

つまり執着とは、変化する世界に抗おうとする心の迷いです。この囚われに気づき、執着を手放すことが、真の安らぎを得るための第一歩とされています。

## やりすぎはよくない？

## ○中道の考え

お釈迦様が悟りを開く直前、壮絶な苦行を捨てたエピソードは、仏教の「中道(ちゆうどう)」という重要な教えを物語る象徴的な場面です。

若くして出家したお釈迦様は、当時のインドで行われていた最も過酷な修行に身を投じました。それは、「日の食事を麻の実一粒、米一粒に制限し、呼吸を止めるほど追い込む」といった、死の一步手前まで自分を痛めつけるものでした。その姿はあばら骨が浮き出て、お腹を触れば背骨に手が届くほどだったといいます。しかし、5年もの歳月をかけて極限まで体を追い込んで、心にある迷いや苦しみが消えることはありませんでした。

お釈迦様は、体を痛めつけるだけでは真理に到達できないことに気づきます。「極端な苦しみは、ただ肉体と精神を疲弊させるだけで、智慧を曇らせてしまう」と悟ったのです。そこで、お釈迦様は修行の場を去り、近くの川で汚れを落とした後、村の娘スジャータから捧げられた「ミルク粥」を口にしました。これを見た仲間たちは「彼は修行に挫折した」と軽蔑しましたが、栄養を蓄え体力を回復させたお釈迦様は、菩提樹の下で深い瞑想に入ります。

そしてついに、快樂に溺れることも、自分を虐めることもない、調和のとれた「中道」の境地こそが真理であると発見し、悟りを開かれたのです。このエピソードは、何事も極端に走らず、適切なバランスを保つことの大切さを現代の私たちに教えてくれています。